

「ふ♡♡っ、あ♡♡あ♡♡」

「もうこんなに乳首勃たせて…♡♡夢子ちゃんは本当にえっちだなあ♡」

「……、っ♡ん♡ん♡♡…だって、きもちいい♡乳首きもちいい♡♡」

お客様の指が乳首の側面をすりすり♡と擦る♡♡

それだけで痺れるような快感が背中を何度も往復して体を震わせてしまう♡

「勃起乳首、しゃぶってって言ってるみたいだね♡♡望み通りいーっぱいちゅうちゅう♡♡して舌でべろべろ♡♡って遊んであげるからね♡♡」

「……っっ、うあ♡♡♡」

私はいわゆる「おっパブ」で働いている。

きっかけはお金じゃない、私の性欲だ。

気持ちいいことが好き。

気持ちいいことに溺れて思考がぐずぐずになっちゃうのが好き。

でも私ができるのはオナニーだけだった。それも一日に何度も。

セックスしたいけれど知らない人とセックスするのは怖かった。

女性向けの風俗も考えたけれどそれこそハマったら怖いし。

それで始めたのがおっぱブ。

下半身は触られずおっぱいだけひたすら触られる仕事。

お客さんも満足するし私も気持ちよくなれるし、しかもこれでお金までもらえるのだ。

他の女の子たちは演技で喘いでいる子たちも多いみたいだけれど私はそうじゃなかった。

本当に気持ちよくなって腰まで動いてしまう。

指で、舌で、乳首を弄ばれるのがたまらなく気持ちいい。

帰ってからオナニーする頃にはおまんこはぐずぐずに

濡れている。

私が演技でなく気持ちよくなっているのが伝わるのか、私を指名してくれるお客さんも増えてきていた。

「夢子ちゃん、いま宇多川(うだがわ)さんから連絡あったんだけど、今日VIPルームだって」

「え、宇多川さんが…？」

休憩の時間になるとスタッフにそう告げられた。

宇多川さんというのは最近よく指名してくれるお客さんだ。

歳は多分四十代くらい。いつもスマートなスーツ姿の、言葉も扱いも優しい、私のお気に入りのおじさま。

その宇多川さんがVIPルームを予約してくれたらしい。

VIPルーム、私は使ったことがなかった。

正直良い印象はあまりない。

先輩たちが言うには部屋が個室の防音になっているのをいいことに無茶をふっかけてくる客もいるんだとか。

でも相手は宇多川さんだ。きっとそのあたりは大丈夫だと思う。

それに部屋が防音なのは私の場合は声を我慢しなくていいからありがたい。

何も怖くない。

今日もいっぱい可愛がって頂こう。

けれど、宇多川さんが到着したと教えられ部屋に入ったら私は驚いてしまった。

「夢子ちゃん、こんばんは」

ベッドサイズの大きなふかふかのソファの上、宇多川さんが私へ手を上げる。

その左右には知らない男性二人が座っていた。

「こ、こんばんは。あの…」

「ああ、紹介するね。こいつは西園(にしぞの)。俺の同僚だよ」

そう言って宇多川さんは左側の男性に手を向けた。

宇多川さんと同年代くらいの、宇多川さんと同じく若々しく見える男性がにこっと笑った。

「で、こっちは城田(しろた)。俺の部下」

今度は右側。

緊張したような表情の二十代くらいの男性がこちらを凝視していた。

「えっと、三人でご利用ですか？他の女の子の指名は…」

「夢子ちゃん一人だよ。お店に聞いたらそれでもいいって言ってくれたからさ。早くこっちおいでよ」

「……は、はい、」

こんなこと初めてで混乱した。

一対一の接客じゃない、一対三なんて。

お店からは何も聞いていなかったし、こんな形式でもいいなんてことも知らなかった。

でもこれも仕事だ。

しっかり対応しなきゃ。

「夢子ちゃんのことを二人に見せびらかしたくてね」

いつものように宇多川さんと向き合うように膝に座ると宇多川さんはすぐにドレスの上から体を撫で始めた。

この手つき。いつもされていることを思い出してそれだけで体が熱くなってしまう。

大きな男の人の手のひらがドレスの薄い生地を巻き込みながら上半身を撫でていく。

左右の二人は好奇心を隠さない表情で私の顔と胸とを見ていた。

さす…♡

さす、さす♡♡

「…、あ♡」

弛んだ布が下着もつけていない乳首に引っ掛かって♡
体がピク♡と反応すると宇多川さんの親指が乳首を押した♡

膨らもうとするそこを嗜めるように♡♡

「っ♡♡」

じわ♡乳首が熱くなる♡♡

「乳首、もう勃っちゃうのかな？布が擦れたただけだろう」

「だ、って♡気持ちいい…♡」

「せめて俺の指で勃たせたいな♡」

宇多川さんはそう言うと、乳首を押したままの指が動かし始めた♡

くる♡

胸に指を沈ませたまま円を描くように♡

くる♡くに♡くる♡♡くる♡♡

「あ♡♡あ♡あ♡あ♡♡」

勃起しかけている先端は押し潰されたまま、動かされる指の振動が響く♡♡

くる♡♡くる♡♡くに♡♡くる♡♡くる…♡♡

「うあ♡♡あ、っ♡♡あ…♡♡あ♡♡」

「今日は声我慢しなくていいんだよ♡気持ちいいなら存分に声出していいんだ♡」

くる、くに♡くるくるくる♡♡くに♡くに♡くるくるくるくる♡♡

「は、はい♡♡あっ♡♡あ、ん♡♡んッ♡♡う♡♡う♡♡あ、ア♡♡♡♡」

指を押し上げようと勃起していく乳首がじんじんする♡♡♡

これ…♡♡

これがたまらない♡♡♡

宇多川さんの膝の上で♡

ひたすら乳首を押し込まれ指を動かされ♡

まだ微弱な快感に体をくねくねと揺らしてしまう♡

勃起乳首♡押さえ込まれてるのが♡♡宇多川さんに支配されているみたいで♡♡

「可愛いだろ、夢子ちゃんの声」

「そうだなあ、表情も気持ちよさそうでいい♡」

「可愛くてエロいです…！」

「二人も触ってみるよ」

そこで宇多川さんの指は離れた♡

途端に、ぷくっ♡と尖る乳首♡♡痛いくらいに突き出てドレスを押し上げている♡

そして宇多川さんの膝に乗ったままの私の乳首に左右から手が伸びてきた♡

西園さんは人差し指の側面に乳首を乗せるように当てると親指で軽く挟み♡♡

城田さんは乳首の上側に爪を当てる♡♡

「は…♡♡は、あっ♡♡」

正面から宇多川さんが私の顔を覗き込んでいて興奮し

てしまう♡

見られる、宇多川さん以外に乳首触られるところ…♡
♡♡

そして二人の指は動いた♡♡

きゅ♡♡

「あうっ♡♡♡」

西園さんの指が乳首を圧迫し♡♡

かりっ♡♡

「あッ♡♡♡」

城田さんの爪が上から下へ軽く引っ搔く♡♡

きゅむ♡♡きゅう♡きゅ、きゅ、きゅ、きゅ♡きゅむ
♡♡きゅうっ♡♡♡

かりっ♡かり、かりっ♡♡かりかりかりかり……♡♡
♡

「あッ♡♡あ♡♡っ、ああ♡♡ん”、ア、あ、ッ♡♡あ、
はアッ♡♡♡」

布越しに敏感な乳首をそうされて♡♡

思わず縋るように宇多川さんの肩を掴んでしまった♡
そうしないと倒れてしまいそう♡♡♡

きゅむ♡♡きゅむ♡♡きゅ、きゅっ♡♡きゅっ♡♡きゅう、きゅうう…♡♡♡

かりかりかりかりっ♡♡かりっ♡♡かりっ♡♡かりっ♡♡かりっ♡♡

「う、ア♡♡は♡♡あんッ♡♡いいっ♡♡これいいです♡♡きもちいい♡♡乳首きもちいい♡♡♡」

「はは、ビクビクしちゃって…♡ちょっと屈んでごらん♡」

言われた通りに体を傾ける、と、宇多川さんは私の頬に手を添えて唇を近づけてきた♡

(あ、キス……、しちゃだめなのに)

お店のルールが頭をよぎったけれどもう遅い♡

唇に唇が触れてすぐ宇多川さんの手が私の頭の後ろに添えられて引き寄せられてしまった♡♡♡

ちゅ♡♡ちゅっ♡♡ちゅう♡♡れるっ♡♡れる…っ♡♡ちゅうううう……♡♡♡♡♡

「っ、は、あ♡♡♡……、……ツツ♡♡♡ん♡♡む♡♡」

キスしちゃだめなのに♡♡

両乳首気持ちよくされてたら断れない♡♡

宇多川さんの唇が私の下唇を吸って♡舌が口の中を舐め回して♡私の舌にぴったりとくっついて♡口内でうねって♡♡

れる♡♡れる♡♡れるお…♡♡♡れる、れる、れる、
れる♡♡♡れるれるれる♡♡♡

「…………♡♡♡…………、ッ♡♡う♡♡ん♡♡♡ん♡♡♡
♡」

頭の中まで熱くなってく♡♡

気持ちいいことでいっぱいになる♡♡♡

きゅ、きゅむ、きゅむ♡♡きゅうっ♡♡♡きゅうっ♡
♡♡きゅむ♡♡♡きゅむ♡♡♡

かりかりっ♡♡♡かりっ、かりっ♡♡♡かりかりかり
かりかり…♡♡♡

それと同時に乳首もずーっと刺激されて♡♡♡

「……夢子ちゃん、すごい顔してるなあ♡」

横から西園さんにそう言われたけれどそれも構えない

♡♡

「……ふ♡♡う♡♡♡あ♡♡♡ん”っ♡♡♡……っ♡♡♡
♡…………、♡♡」

背中を丸めて乳首を二人の指に差し出し♡♡

宇多川さんのキスをもっともっとと欲しがるように舌
を突き出す♡♡

(きもちいい♡♡きもちいい♡♡♡おまんこもうぐちゅ
ぐちゅになってる♡♡♡キスと乳首一緒にされるのやば
い♡♡♡イきたい♡♡♡クリ触ってくれたらイけそうな
のに…♡♡♡♡)

「腰動いてますね、えっろ♡♡」

いつの間にかパカッと開脚していた足は、宇多川さん
の膝に体重を乗せたまま前後に揺れていた♡♡

騎乗位でスイングするように腰を波打たせてしまう♡
♡♡

そうしているとその開いた足の中心に宇多川さんの手
が移動してきて♡♡

(あ……、それだめ、お店のルールで……、でも♡♡触

ってほしい♡♡♡おまんこ触ってほしい♡♡♡♡どうせ
バレないから♡♡個室でバレないから触って♡♡♡そこ
……♡♡♡♡♡)

限界まで開いた足の中心、濡れた下着の上から♡♡♡

ちゅくっ♡♡♡♡♡

指がクリトリスを押し潰す♡♡

「んお……ッ！♡♡♡♡♡」

下半身から頭のとっぺんまで駆け抜けていった閃光に、
体がガクンッと大きく揺れた♡♡

それでも誰の手も私の体から離れなかった♡♡

きゅっ♡♡きゅッ♡♡きゅっ♡♡きゅむきゅむきゅむ
きゅむきゅむっ♡♡♡♡♡

西園さんの指は勃起乳首を何度も挟み込んで刺激を送
ってきて♡♡

かりかりかりかりっ♡♡♡かりかりかり、かりかり
かりかりかり……♡♡♡

城田さんの爪は細かく乳首の先端を弾き♡♡

「こら、ちゃんとキスして♡」

ちゅ♡♡れる♡♡れるお♡♡♡れる、れる、れるれる
♡♡ちゅむッ♡♡♡ちゅむちゅむちゅむ♡♡♡

宇多川さんの唇と舌は私のそれから離れず♡♡

ちゅくっ♡♡

クリトリスを押し潰した指先は♡♡

ちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅく
……っっ♡♡♡♡♡

下着の中の小さな粒をこねくり回す♡♡

「……〜〜〜〜ッ” ッ” ♡♡♡んアッ♡♡♡あッ♡♡
だめです、……っ♡♡お♡♡♡お♡♡♡これ、だめ…！
♡♡っっお、ほ、お♡♡♡♡お♡♡♡♡♡」

「だめって言いながら腰動いたままじゃないか♡」

「だって♡♡♡こんな♡あ” ッ♡♡♡されたら……、っ
♡♡♡……っ、やばい、これ、イきそ……ッ！♡♡
♡♡♡」

また口を塞がれる♡♡

背中を丸め宇多川さんの口内に舌を差し出し、その上
浅ましく腰を前後にスイングさせて♡♡♡

私は迫り上がってくる絶頂感に宇多川さんの肩に爪を
立てると♡♡♡

「…………や、う”、いくっ♡♡♡いっちゃいます…！♡
♡…………〜〜〜〜ア”っ、いくっ！いくっいくっいく
ッ！！♡♡♡♡♡……んう” ううううう” う” ツツツ！
！♡♡♡♡♡」

宇多川さんの膝の上で絶頂に体を跳ねさせた♡♡♡♡

「……ッ、は、あ♡♡♡はあ♡♡」

呼吸を整えようと大きく息を吸う♡♡

そうしているうちにドレスを肩から下げられてしまっ
た♡♡♡

さんざん指で弄られ勃起しきった乳首が露わになった
♡♡♡

「これが夢子ちゃんの発情乳首かあ♡♡今度はもっと気
持ちよくなるうな♡♡」

そこへ西園さんの顔が近づいてきて♡

ちゅぷ♡♡♡

乳首を口に含まれると♡♡

「……お、ほ♡♡♡♡♡」

過敏になった乳首が湿った粘膜で包まれる感触に全身が栗立つ♡♡

「お、俺も…！」

反対の乳首にも城田さんが♡♡

柔らかく包むような西園さんとは対照的に窄めた唇で、
ぢゅ…ッ♡♡♡

と吸い付いてきた♡♡

「……ッ♡♡♡♡♡や、あ♡♡イったばっか、なのに
……♡♡♡♡♡」

ちゅ♡ちゅむ♡♡ちゅ、ちゅ、ちゅう…♡♡

西園さんの唇が乳首を揉み込むように動き♡♡

ぢゅ、ぢゅ、ぢゅぶッ♡♡♡れる♡♡れるお♡♡

城田さんは強く乳首を吸って勃起を強調したあと分厚い舌で舐め回した♡♡

「ふ♡♡ あ♡♡♡ ああ…ッ！♡♡」

ぞくぞく♡♡背中が震える♡♡♡

さっきまで指でいじられてた絶頂したばかりの乳首に♡♡

今度は二人の濡れた口内で快感を送られる♡♡♡

「気持ちよさそうだね、こんな夢子ちゃんが見られて嬉しいな♡」

膝の上で悶える私を、宇多川さんはまたキスしてしまい
いそうな距離でじっとりと見つめていた♡

…キス、したい♡♡♡

また乳首も舌も捕らわれたままイきたい♡♡♡

私は潤んだ目を細め宇多川さんの唇に吸い寄せられて
いく♡♡

もう少しで唇が触れそうになったとき♡

「…っあ♡」

下着が横へずらされ♡♡♡

ちゅぷ…♡♡♡

指が中へ入ってきた♡♡♡

「あ、…ッあ？♡♡」

ぐずぐずに濡れたおまんこに♡♡

なんの抵抗もなく宇多川さんの指が入ってくる♡♡♡

「すごいな、こんなに濡れて…♡夢子ちゃんは本当にえ
っちなことが大好きなんだね♡♡ここずっと欲しかった
んじゃない？」

「あっ、あ♡♡♡あッ♡♡♡うそ♡♡♡」

「奥がうねってるよ♡」

乳首とクリトリスだけじゃなくてとうとうおまんこの
中まで…♡♡♡

宇多川さんの指が全て埋められるとナカがひくついて
いるのが自分でも分かる♡

睫毛の触れそうな距離で宇多川さんに見つめられ、両
乳首を吸われ舐められて、おまんこの中に指の存在を感じ
て、気持ちよくなっている♡♡♡

「ふ♡♡♡う、あ♡♡♡ッ♡♡♡」

「さあ、今度はおまんこでイこうか♡夢子ちゃんはどうされるのが好きなのかな？♡♡」

ずるっ♡♡

「っあ♡♡」

指がまっすぐ引かれて♡♡♡

ぐちゅっ♡♡♡

「うんッ♡♡♡」

奥まで入れられて♡♡

ずるっ♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡

「ッあ♡♡はアっ♡♡」

ずるっ♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡

「あああッ♡♡…ッ！♡♡♡」

「これはどうかな？♡」

今度は二本の指を広げた状態で♡♡

ずるっ♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡

「は、ア…っ♡♡♡んううッ♡♡♡」

指がピストンされる♡♡♡

ずるっ♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡

「く、ん”ッ♡♡♡あん”♡♡♡」

吸われている乳首もなんだか力が強くなった気がして
♡♡

ときどきそっちに意識を持っていかれると宇多川さん

の指を飲み込むみたいに入口を締めてしまっていた♡♡
♡

「じゃあ、これはどう？♡♡」

「ひ♡♡♡」

今度は中で指先が曲げられた♡♡

その指先は私のおまんこの上側を押し上げ、そのまま

ずるるっ♡♡♡

引くから♡♡

「お…ッほ♡♡♡」

おまんこを挟る感覚に飛び上がってしまった♡♡♡

「逃げないでよ♡♡」

腰に回される宇多川さんの手♡♡

私の腰の後ろを支えるようにその手に圧がこもると♡

♡♡

ぐぢゅっっ♡♡♡ずるるっっ♡♡♡ぐぢゅっっ♡♡♡
ずるるっっ♡♡♡ぐぢゅっっ♡♡♡ずるるっっ♡♡♡ぐ
ぢゅっっ♡♡♡

「…おッ♡♡♡んおお♡♡♡っ♡♡お♡♡オッ♡♡おッ♡♡ン♡♡♡ほ♡♡♡」

「これがいいんだね♡夢子ちゃんのおまんこ、閉じようと必死だ♡♡♡これを無理やりこじ開けて指でズコズコされるの、イイんだろう♡♡♡」

ぐぢゅっ♡♡♡ずるるっ♡♡♡ぐぢゅっ♡♡♡ずるるっ♡♡♡ぐぢゅっ♡♡♡ずるるっ♡♡♡ぐぢゅっ♡♡♡

体がのけぞる♡

そして突き出してしまった乳首を吸う二人は、私の情けない声に煽られるように激しくなった♡♡♡

ぢゅっ♡♡ぢゅうっ♡♡ぢゅっぢゅっぢゅっぢゅっぢゅっ♡♡♡

れるるるるる、れるるるるるっ♡♡♡れるるるるッッ♡♡♡

乳首全体を唇で強く挟まれたまま先っぽを細かく吸われ♡♡

口内に含まれたほうはその中で舌で高速で舐められる♡♡♡

「おッ♡♡お、ッ♡♡ん♡♡♡あ♡♡♡これっ♡やば

♡♡♡」

両方の胸の先端から刺激がビリビリと背中を伝い、

ぐちゅっ♡♡♡ずるるっ♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡
ずるるっ♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡ずるるっ♡♡♡ぐ
ちゅっ♡♡♡

締まってしまったおまんこは宇多川さんにピストンさ
れて♡♡♡

ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡ちゅっ♡
♡ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡

れるるるるるるっっ♡♡♡れるるるるるるるっっ
♡♡♡れるるるるるるるっっ♡♡♡

ぐちゅっ♡♡♡ずるるっ♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡
ずるるっ♡♡♡ぐちゅっ♡♡♡ずるるっ♡♡♡ぐ
ちゅっ♡♡♡

体を強張らせる私を、三人は追い詰めるように一定の
リズムで責め始めた♡♡♡

ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡ちゅっ♡
♡ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡

れるるるるるるっっ♡♡♡れるるるるるるるっっ
♡♡♡れるるるるるるるっっ♡♡♡

ぐぢゅっ♡♡♡ずるるっ♡♡♡ぐぢゅっ♡♡♡
ずるるっ♡♡♡ぐぢゅっ♡♡♡ずるるっ♡♡♡ぐ
ぢゅっ♡♡♡

「〜〜ッ♡♡♡お”っ、ア、あ♡♡♡きもちいい♡
♡♡乳首もおまんこも気持ちいい！♡♡っ、あ〜
〜♡♡♡♡」

気持ちいいことでいっぱいになって顎が上がってしま
う♡♡

そのまま絶頂の予感に体をつっ張らせていると♡♡♡
ピストンしている宇多川さんの親指が♡♡♡

ぐりゅっ♡♡♡

クリトリスを押し潰して♡♡♡

「おッ”ッ”…！！♡♡♡♡♡」

ぐりゅぐりゅぐりゅぐりゅぐりゅぐりゅッ♡♡♡

「んおお”ッ♡♡♡♡らめっ、そえ」

そのままこねくり回すから♡♡♡

ぐりゅぐりゅぐりゅぐりゅぐりゅぐりゅぐりゅぐりゅぐりゅ
ッッッ！！♡♡♡♡♡♡

「ッお”、っっんオおおおお♡♡♡イクっ！♡♡イク！
！♡♡♡♡♡………～～～～～っっっ！！！！♡♡♡
♡♡♡♡♡♡」

私はまた絶頂してしまった…♡♡

「んッ♡♡あ♡♡♡や、う♡♡♡」
こり♡♡こり、こり♡♡
くりくりくり♡♡♡
さす♡♡さす♡♡さす♡♡

絶頂でビクついたままの私の乳首を西園さんと城田さんは指であやすようにこねている♡

今は小さな刺激でも大きな快感となってしまう♡

宇多川さんの膝から下ろされソファに寝かされても離れないその指に私は体をくねらせながら顔をとろけさせていた♡

そこに落ちる影♡♡

部屋の照明で逆光になった宇多川さんが私に覆い被さろうとしていて♡♡♡

見えている♡♡

バキバキに勃起した宇多川さんのおちんぽが……♡♡
♡♡♡

「夢子ちゃん、いいよね？」

私を見下ろすギラついた目♡♡

いつもの優しい宇多川さんの目と違う、オスを感じる
目に私は息を飲んだ♡♡

本当はダメ♡

ルール上はダメだけど、

こりこりこり♡♡こす、こす、こす♡♡♡

くり♡♡くり♡♡くり♡♡ぐりぐりぐりぐり…♡♡♡

両乳首をいじられ続け気持ちよくなっている
私に断ることなんてできない♡♡♡♡♡♡

「いいです…♡♡♡おちんぽ♡♡入れてください♡♡♡

♡♡」

私のその言葉に私の乳首をこねている西園さんと城田さんは私の乳首に吸い付いた♡♡

西園さんが乳首を吸い上げ、

ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっっぽ♡♡

と音を立ててフェラチオするように顔を上下させれば、それに負けじと城田さんは、

ぢゅるるるるるッッ♡♡ぢゅるるるるるるるッッ♡♡♡

わざわざしく音を立て空気を含んだ振動で乳首を細かに揺らす♡♡♡

「ッ♡♡あ♡♡アあッ♡♡っ”♡♡♡」

その刺激に背中を浮かせれば、二人で見えなくなってしまった宇多川さんの手が私の膝を開き♡♡

ぐ、ぷ♡♡♡♡

太いちんぽをゆっくり侵入させてきた♡♡♡♡

ちんぽが充分に濡れたそこを割って、熱い先端を私の粘膜が包む♡♡

「……、お♡♡…お♡♡……、…っ♡♡♡♡」

ずっと自分で処理するしかなかった欲が、
ちんぽで満たされる……♡♡♡♡

「いいよ、夢子ちゃんのおまんこ…♡気持ちいい♡♡
♡」

そう言う宇多川さんは一気に奥まで押し込んで♡
腰を動かし始めた♡♡♡

たんっ♡♡たんっ♡♡

軽い調子で打ち付けられる腰♡♡♡

それでも♡♡

ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっ
っぽ♡♡

ぢゅるるるるるッ♡♡ぢゅるるるるるるッ♡♡♡

両乳首を責められていると乳首からおまんこへ気持ち
いい感覚が響いて♡♡♡

「んオ`っ♡♡♡お♡♡♡ッ、ほ、お♡♡♡」

その衝撃に声が漏れる♡♡

たんっ♡♡たんっ♡♡たんっ♡♡たんっ♡♡たんっ♡
♡たんっ♡♡

「おッ♡お♡♡♡っ、ほ♡♡オ♡♡♡っ♡♡ッ”♡♡♡」

「いつも乳首で気持ちよくなってる夢子ちゃんを見てちゃんぽ入りたいって思ってたけど…おまんこもえっちなこと大好きみたいだね♡」

ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっっぽ♡♡ぢゅっっぽ♡♡

ぢゅるるるるるッッ♡♡ぢゅるるるるるッッ♡♡♡
「ン” ん…ッ♡♡…ッ、お、お、お♡♡♡ちくび、されながら♡おちんぽされるのやばいいい……ッ♡♡♡♡」
「どうやばいの？♡♡」

そこで宇多川さんのピストンは強くなった♡♡♡

とちゅっ♡♡♡とちゅっ♡♡♡とちゅっ♡♡♡とちゅっ♡♡♡とちゅっ♡♡♡

一突き一突き確実に奥を打つ♡♡

それに悶えると今度は

ぢゅっっぽ！♡♡ぢゅっっぽ！♡♡ぢゅっっぽ！♡♡
ぢゅっっぽ！♡♡ぢゅっっぽ！♡♡

ぢゅぶぶぶッッ♡♡♡ぢゅぶぶぶッッッ♡♡♡ぢゅぶぶぶぶぶッッ！♡♡♡

乳首は乳輪ごと乱暴に吸引され窄めた唇で責められて♡♡

「ちくび♡♡されると♡♡♡おまんこに響いて…っ♡♡
おちんちん締めちゃって♡♡♡それでっ♡もっと気持ち
よくなって……！♡♡♡♡♡」

とちゅっ♡♡♡とちゅっ♡♡♡とちゅっ♡♡♡とちゅ
っ♡♡♡とちゅっ♡♡♡とちゅっ♡♡♡

「そうだね、おまんこがちんぽ離さないって抱きしめて
くれてるよ♡♡」

「おちんぽぎゅーって♡♡して、る、おまんこ…っ、♡
♡おちんぽで突かれるの♡♡♡きもちいい……！♡♡
♡」

——バコッ！！♡♡♡♡♡♡

「うゝ ………ツツツ♡♡♡♡♡」

いきなり体重をかけられた♡♡♡♡

重たい衝撃に目がチカチカして♡♡

それでも乳首は吸われたままで宇多川さんは見えない
♡♡

見えないところで固定するように両手で腰を掴まれて
♡♡また宇多川さんは動き出した♡♡

バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡
バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡バ
コッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡

「うお” ツ♡♡♡オ” っ♡♡♡おッ” ♡♡♡ッ” ♡♡♡
おちんぽっ♡♡♡♡♡おもい、ッ” ♡♡♡おく”、き”
もち……ッ” ツ” ！！♡♡♡♡♡」

ぢゅッッぽ！♡♡♡ぢゅッッぽ！♡♡♡ぢゅッッぽ！
♡♡♡ぢゅッッぽ！♡♡♡ぢゅッッぽ！♡♡♡
ぢゅぶぶぶぶッッッ！♡♡♡ぢゅぶぶぶぶッッッ！♡
♡♡ぢゅぶぶぶぶッッッ！♡♡♡

「オ” ツ、ほおっ♡♡♡ちくび♡♡♡いいっ♡♡♡お♡
♡♡♡オ” ♡♡♡ちくびじんじんするっ♡♡♡あちゅ、い♡
♡きもちいいっ、きもちい…！♡♡♡っ、お” オオ、お
…ッ！！♡♡♡♡♡」

バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡
バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡バ
コッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡
ぢゅッッぽ！♡♡♡ぢゅッッぽ！♡♡♡ぢゅッッぽ！
♡♡♡ぢゅッッぽ！♡♡♡ぢゅッッぽ！♡♡♡

ぢゅぶぶぶぶッッッ！♡♡♡ぢゅぶぶぶぶッッッ！♡
♡♡ぢゅぶぶぶぶッッッ！♡♡♡

宇多川さんは何も言わず、ひたすら私のおまんこの奥
を突き続けた♡♡

乳首をしゃぶる二人も何も言わない♡

私をまた追い詰めるように三人はひたすらに私の気持ち
いいところを責め続ける♡♡♡♡

バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡
バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡バ
コッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡バコッ！！♡♡♡

ぢゅッッぽ！♡♡♡ぢゅッッぽ！♡♡♡ぢゅッッぽ！
♡♡♡ぢゅッッぽ！♡♡♡ぢゅッッぽ！♡♡♡

ぢゅぶぶぶぶッッッ！♡♡♡ぢゅぶぶぶぶッッッ！♡
♡♡ぢゅぶぶぶぶッッッ！♡♡♡

「ッ” お、お、お……、っ♡♡♡♡ら、め♡♡♡も
う、……ッ” ♡♡♡♡イ、っちゃう♡♡ちくびしゃぶら
れて♡♡♡おまんこおく、おちんぽで突かれていく♡
♡♡♡♡いく♡♡♡いく♡♡♡いく♡♡♡いく
……っ！！♡♡♡♡♡」

掴まれている腰が、それでも上下に揺れた♡♡♡

ますます膨張したおちんぼがおまんこの壁をごりごり
♡♡とえぐってくれて、私は喉をそらす♡♡♡♡

「イク、…………ツッ！！♡♡♡♡お”…………ツ” ツ
” ツ” ツ” ツ” ！！♡♡♡♡♡♡♡♡」

ぶるぶるっ♡♡

ぶるぶるぶる、っ♡♡♡♡♡

ソファの上でブリッジのように背中も腰も浮かせ、胸
を突き出して絶頂した♡♡

ずるりと抜けた宇多川さんのちんぼ♡♡

宇多川さんはそのまま私の頭上まで来て私の顔を両手
で包むと呆けて開きっぱなしになっていた唇に吸い付い
た♡♡

視界が宇多川さんでいっぱいになる♡♡♡

それから宇多川さんは解放された両乳首に両手を伸ば
し♡♡♡

しこ……♡♡

しこ♡♡しこ♡♡しこ♡♡

指先で摘んで上下に擦った♡♡

「……、ふ♡♡お♡♡♡……んお♡♡♡おッ、お♡♡♡」

まただ♡♡

絶頂してすぐに乳首であやされる♡♡♡

絶頂後の熱が急激に下がった体にすぐに火をつけるように快感を送られる♡♡

しこ♡♡しこ♡♡しこ♡♡

ぢゅっ♡♡ぢゅる♡♡♡ぢゅる♡♡♡ぢゅる、ぢゅっ♡♡♡

喉をそらしたまま懸命に宇多川さんに舌を差し出し、擦られる乳首にビクついてしまう♡♡

体を振っていると今度は誰かに両足を持ち上げられた♡♡

「俺も夢子ちゃんのおまんこ楽しみたいなあ♡♡」

西園さんだ♡♡♡

西園さんの両肩に足を乗せられお尻が浮く♡♡

閉じたおまんこにちんぽの先が当てられると♡♡

ぬちゅ♡♡♡

ぢゅ……♡♡♡

「……っ♡♡♡♡♡」

ゆっくり入ってきて♡♡♡

ぬちゅ♡♡♡ぬちゅ…、ちゅ♡♡♡

西園さんのちんぽが埋まると♡♡

「……ううう♡♡♡♡♡」

お尻が浮いた体勢のせいでさっきまでとは違う、更に深いところにちんぽの先を押し込まれた♡♡

奥の、ちょっと上♡♡♡

内臓まで押し上げられるようで少し苦しくて、でもそれが気持ちよくて♡♡♡

「そうだよね、夢子ちゃんは俺のちんぽじゃなくても気持ちいいよね」

「ン んん……ッ！♡♡♡♡♡」

目を閉じて西園さんのちんぽを意識していると宇多川さんに乳首を引っ張られた♡♡♡♡♡

きゅう……♡♡きゅうう……♡♡♡♡♡

優しく擦っていたはずの乳首が♡♡

根元を締められそのまま上に伸ばされて♡♡♡♡

「う♡♡♡あ……ッ、あ♡♡は、あ♡♡♡うだ、がわ

さ、」

「お仕置きだよ」

きゅ♡♡♡きゅうううっうう……♡♡♡♡♡

言葉の鋭さとは真逆の、楽しそうに興奮した顔が私を見下ろしている♡♡

「あ、ア…ッ、あ♡♡♡♡だめ、です、それ♡♡♡ちくび、ひっぱらないで♡♡」

伸ばされた薄い皮膚が更に敏感になってしまう♡♡

■続きは製品版にて♡